

障がい者の社会への“完全参加と平等”を！

ときめき Fukuoka

2022.9
No. 265



伝えたい“おもい”を、
伝わりやすい“かたち”に

— スローコミュニケーションを知る —

- 05 福障協だより「加盟団体の紹介～第7弾～」
- 08 身障協だより「白熱！障がい者社会参加訓練事業」
- 09 福岡市からのお知らせ「音声コードをご活用ください」
- 11 9月・10月の企画展示情報～福岡市介護実習普及センターより～

伝えたい「おもい」を、伝わりやすい「かたち」に

「スローコミュニケーションを知る」

本年5月、「障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」が公布・施行されました。障がい者も必要な情報を十分に取得し、利用していけるような社会作りを推し進めていくための法律です。

現在、身体障がい者の情報入手のための情報保障が徐々に進みつつあります。視覚障がい者向けの情報保障であれば、書籍や雑誌の点訳や音訳をはじめ、テキストデータによる音声化等があります。また、聴覚障がい者向けの情報保障であれば、手話通訳や要約筆記（パソコン入力や筆記通訳）といったものがあります。これらにより、会議や研修会、講演の情報取得し易くなりました。さらにICTの発達により、PCやスマートフォンで、文字を音声化したり、言葉を文字化したりするアプリが出回っていますので、情報保障が更に進化していくかも知れません。

一方、知的・発達障がいの人たちは、必要な情報を得ることは、難しい状況です。そこで、どんな人でもほしい情報を「わかりやすい」かたちで入手できるための取り組みを行っている団体があります。

彼らは、「スローコミュニケーション」という一般社団法人です。主に知的障がい者の情報バリアに着目し、「わかりやすいニュース」を週一回、同法人のホ

ームページやLINEで発信する等、まさに情報のアクセシビリティを推進している団体です。

同法人の副代表であり、立正大学社会福祉学部准教授、打浪文子先生にお話しをお伺いしました。

スローコミュニケーションとは？

わたしたちは、一般社団法人スローコミュニケーション（以下、スローコミュニケーション）といいます。「わかりやすい文章、わかちあ文化」をテーマに、「わかりやすい」情報の普及および啓発活動を行っている非営利団体です。

現代のネット社会では、スピードが速く量の多い情報のやり取りや、SNSでの絶え間ない双方向のやり取りが繰り返られています。障がいゆえに、そのスピードの速さや量についていけない人も多くいます。もともと人と人が時間をかけて向き合ったり、わかりあったりすることが時には必要だと感じます。

わたしたちは知的障がいのある人たちと一緒に、情報を作ることを長年行ってきました。互いの意思をやり取りする際に、ときに時間をかけて「わかりやすさ」を作ってきました。こうしたコミュニケーションのスタイルをスローコミュニケーションと呼び、団体の名称にしました。知的障がいのある人たちと一緒に「わかりやすい」情報を作っていくこと、相互

理解を生み出していくことが、「スローコミュニケーション」そのものだと考えています。

どのような活動をされていますか？

わたしたちは、主として知的障がいのある人たちを対象としつつ、どんな人達に対しても、必要な情報をわかりやすい日本語で届けるための活動をしています。具体的には、10名程度のボランティアが週に一度、社会の中で話題になっているニュースを取り上げて、わかりやすく書き直して発信する活動を行っています。情報量を絞って短文にする等、わかりやすくするためのルールを用いて記事を書き、知的障がいのある当事者のチェックを経て、ホームページやLINEで発信しています。

ほかに、行政などから福祉に関するパンフレットの「わかりやすい」版の作成依頼を受けることもあります。元新聞記者や編集者、言語学のプロ、それに知的障がいのあるメンバーの知見を駆使して、よりよい成果物になるよう作成しています。

さらに、インターネットを介した「わかりやすさ」の普及活動にも取り組んでいます。スローコミュニケーションのホームページでは、表現や文章をわかりやすく言い換えるための「言い換え検索」という機能を設けています。



開発されたスマホアプリ



スローコミュニケーションのホームページ

また、普段から情報の難しさを感じている方々が「わかりやすい」情報を自分にとって合った方法で気軽に利用できるよう、「わかりやすい」情報提供のためのスマホ用のアプリを開発し、無料で提供しています。

新聞「ステージ」の時代

この記事をお読みの方の中にはご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、「一般社団法人全国手をつなぐ育成会連合会（以下、育成会）」という、知的障がい者の親の会（権利擁護団体）があります。その前身である「社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会」では、「ステージ」という知的障がいの方向けの新聞を発行していました。スローコミュニケーションのメンバーは、「ステージ」の作成や研究にかかわっていた人たちを主として構成されています。

当時、この新聞の発行にあたって開かれていた編集会議には、知的障がいのある当事者も多く参加していました。この編集会議は、知的障がいのある人たちが「わからない」と素直に意見を述べることで、「わかりやすい」表現が増えてきたらどうか？と、障がいの垣根を越えて真剣に議論し合える場でした。知的障がいのある当事者からの「この日本語が分からない」という率直な意見に対し、皆でよりよい表現を模索しながら新聞作りを進めていました。

また、当事者の方に「どんな記事を読みたい」のか意見を出してもらったり、時には記事を書いてもらったり、取材に行ってもらったりして、「ステージ」という「みんながわかる新聞」を知的障がいのある人たちが一緒に作り上げていました。見た目は普通の新聞のようですが、文章のわかりやすさ（難しい語彙を使わない、漢字が連続するのを避ける等）と、文章の見た目（意味理解や視線移動がしやすい文節での改行等）に特徴

があります。

「ステージ」の主たる読者は、軽度の知的障がいの人たちでした。しかし、写真やイラストなどを多く配置することで、重度知的障がいの方々もご家族や支援者と一緒に楽しんでいただけていました。現在のスローコミュニケーションの活動は、「ステージ」で培ったノウハウをもとに行っています。

「わかりやすさ」のニーズ

「ステージ」の活動や、現在のスローコミュニケーションの活動を通して、わたしたちは痛感していることがあります。

それは、「わかりやすさ」とは知的障がいのある人のためにあるのではなく、知的障がいのある人と障がいのない人が共に何かの活動をする時に必要な「架け橋」として、生まれてくるものだ、ということだと思います。知的障がいのある人たちが互いにわかりあうためには、想いや考えを「わかりやすい」かたちで伝えることが必要になります。相手とわかりあいたいという切なる思いの結果として生まれるものが、「わかりやすさ」なのだと感じています。

知的障がいのある人たちだけでなく、読みにくさや見えにくさを感じている発達障がいの人、日本語でのやり取りが難しい海外から移住されて来た人、書記日本語の習得が困難な聴覚障がいのある人、軽度の認知症の人なども、「わかりやすい」情報を必要とされています。

情報のスピードについていけないけれども、「わからないことを恥ずべきこと」と思っている人たちが多い世の中に

なってきたのではないのでしょうか。

わからないことを「わからない」と主張し、「わかりやすい」情報を手に取ることは、その人への「合理的配慮」であり、障がいのある人の権利であることを知ってほしいです。



生活 ウーバーイーツって、なに？

生活
せいかつ

▶ 四角い大きなカバンを背負って道を走る自転車やバイク。最近、よく見かけませんか？これは、レストランなどの料理を家まで運んでくれる宅配サービスのものです。「ウーバーイーツ」や「出前館」などの会社が有名です。

▶ 食事を家まで運んでくれるのは、昔は寿司やそばの出前、宅配ピザなどしかありませんでした。しかし最近では、この宅配サービスを使ってもっといろいろなお店から料理を運んでもらい、

自分の家で食べることができます。

▶ 宅配サービスを使うには、手数料を払わなければなりません。手数料は、だいたい数百円ですが、頼んだ料理の値段や宅配サービスの会社などによって変わります。

▶ 新型コロナウイルスのせいで外食がしにくくなっています。このため、宅配サービスを使う人が増えています。

▶ 料理を運ぶ人も増えました。



その中には自転車やバイクの運転マナーが悪い人もいます。宅配サービスの会社では警察などと協力して、料理を運ぶ人の交通マナーをよくするための講習会を開いています。

「わかりやすさ」が生む権利保障

身体障がい（視覚障がい・聴覚障がい）者向けの情報保障は、早い段階で必要性が訴えられています。方法も明確です。しかし、知的障がいの分野は「家族や支援者がいれば良いじゃないか」と、情報保障の必要性が認識されにくかったと思われまふ。

知的障がいのある人たちは、自分のニーズをうまく言葉にすることができない人が多いです。知的障がい者向けに「わかりやすい」情報が欲しい、という声が上がってきたのは2000年代に入ってからです。うまく自分の意思を伝えられるか、自己主張やニーズの表明をできるか否かは、他の障がいと比べて大きな違いだと思われまふ。

ことばやコミュニケーションの面において、知的障がいのある人たちが受動的にならざるをえない環境は、この社会にすでに作り上げられ、当たり前のもので

【ちょbitフォーカス】

突発性難聴者等による中途失聴者は、後天性障がいのためなかなか人に言えず大変な苦悩を抱えています。手話を第一言語とする先天性障がい者とは異なり、文字情報による支援が大変重要になります。難聴者（きこえにくい）皆さんの中には人との会話や情報を得るために、コミュニケーション講座を受講して手話を学ぶ方もいます。同じ障がいの者同士似た境遇の中にいますので、交友関係を広げたいと感じていらっしゃる。一方、テクノロジーの進歩により、人の言葉を画面に表示してくれる「スマートディスプレイ」や「スマートグラス」といったアイテムも開発されています。



難聴者・中途失聴者コミュニケーション講座
講師から手話を学ぶ



相手の言葉を文字化する「字幕透明ディスプレイ」
(開発：ピクシーダストテクノロジーズ株式会社)

されてしまっています。例えば、知的障がいのある人たちの身の回りでよくあることのひとつに、通っている施設からのお知らせやご案内のプリントが、利用者ご本人を飛び越えて、ご家族へ直接行きがちなことがあります。予定の管理や参加の判断等をご家族や保護者の方がされていることが多いからでしょうけれども、知的障がいのある人たちは、自分自身のことを自分で決めたり、知ったりする機会をいつの間にか失っていることが多いのです。

知的障がいのある人たちの様々な経験や自己決定を保障するためにも、「わかりやすい」情報を発信することが大切です。

スローコミュニケーションの今後の展望

これまでの日本の社会では、知的障がいのある方々は抑圧され、彼らの声を社会的な形で聴くことはほとんどありませんでした。知的障がいのある人たちが、自分に合った情報にアクセスし、また同

時に彼ら自身の思いを安心して表現できる社会であってほしいと思っています。

スローコミュニケーションは、「わかりやすい」情報を、必要な人たちが必要な時に手に取れるような社会を、知的障がいのある方々と共に作っていききたいと思っています。そして、障がいの有無にかかわらず、「あなたの声を聴く」というような「スローさ」をもって、「わかりやすさ」を作り、広げる活動を続けていきたいと思います。

一つの非営利団体でできることは限られています。わたしたちの願いに賛同してくれる方が増え、一緒に活動したり、応援したりして下さる方が増えることを願っています。ぜひお気軽にスローコミュニケーションのウェブサイト等にアクセスしてみてください。

これからの時代のコミュニケーションを、「わかりやすさ」を通じて一緒に考え、作っていきましょう。

打浪 文子(うちなみあやこ)

福岡市出身

一般社団法人スローコミュニケーション副代表

立正大学(埼玉県熊谷市)社会福祉学部准教授

専門は「知的障害者の情報保障」や「知的障害者向けのわかりやすい情報提供」。

著書に「知的障害のある人たちと「ことば」—「わかりやすさ」と情報保障・合理的配慮」がある。



一般社団法人スローコミュニケーション ウェブサイト
<https://slow-communication.jp/>

言い換え検索
<https://slow-communication.jp/para/>

「わかりやすいニュース」スマホ用アプリ

iPhoneはApp Storeで、AndroidのスマホはGoogle Playで、「わかりやすいニュース」と検索してください。